

書 評

Judy Ledgerwood ed. *Cambodia Emerges from the Past: Eight Essays*. DeKalb: Southeast Asia Publications, Center for Southeast Asian Studies, Northern Illinois University, 2002, 305p.

2003年は UNTAC(国連カンボジア暫定統治機構)によって準備されたカンボジア統一選挙から10年目にあたり、夏には1998年に続く2度目の国政選挙が予定されている。この期間、比較的安定した国内外の状況のもと、内戦と国際的孤立を脱したカンボジア社会は急激な変化を遂げた。本格化した開発援助と世界市場への参入によって加速された社会経済的变化は当然として、Pol Pot の死と Ieng Sary をはじめとした高級幹部の投降、すなわち政治勢力としてのポルポト派の消滅は、この10年間のカンボジアの変化を如実に象徴する。またカンボジア研究にとっても、1960年代末より閉ざされてきた現地調査の道が開け文書資料の整理公開も大きく進んだ、大きな変化の10年であった。アメリカを中心としたヴェテラン、若手のカンボジア研究者による最新の論考を集めた本書は、以上のような変化の渦中にあるカンボジアの現在を把握し、将来の研究の方向性を探るために好適な論文集である。

第1章は、歴史家 David Chandler が、民主カンブチア政権(ポルポト政権)下の政治犯収容施設に残された大量の告白文書を取

り上げる。S-21 とコード名で呼ばれた首都プノンペンの収容所には、3年あまりの期間に約14,000人が収容され、ほぼ全員が殺害された。Chandler は、The Tuol Sleng Museum of Genocidal Crime として現在公開されている収容所で発見され、入手可能な4,300名ほどの囚人の尋問書を、誘導された歴史文書と位置づけ、そこに党中央の意識の反映をみようとす。つまり、彼によると、ポルポト政権の中核ともいえるこの機関を支配していたのは、拷問を用いて党中央が必要とする「真実」を囚人に告白させ、それを綿密に文書化することで過去を支配し歴史を書きかえようという営みであった。その結果、さまざまな急進政策が行き詰まり、窮状が深まれば深まるほど S-21 はより円滑に機能し、革命的熱意によって「発掘」された真実と引き替えに多くの人命が失われていった。

1990年代に公開された新資料を用い、指導者たちの意識を考察の対象とする意欲的な取り組みは、評価できる。しかし内容は同著者の単著と大きく重なり、記述の厚みと論旨展開の注意深さの点は及ばないと言わざるをえない [Chandler 1999]。

第2章は、人類学者 John Marston による民主カンブチア政権とモダニティの思想との関係についての論考である。Pol Pot から民主カンブチア政権の指導者の多くが、青年期にフランスへ留学していたことは広く知られる。そこで、後に遂行した革命の諸政策を留学経験と関連づけ、近代化または急進的なマルクス=レーニン主義革命を目標とした「失敗したモダニティ」として民主カンブチアを理解

する視点が提出されてきた。しかし Marston はそれを退け、人々が独自の時空間において伝統と認識するものと対照して思い描くある認識の枠組み、つまり過去と未来とを結びつけるセンスからモダニティの問題へのアプローチを試みたいと主張する。

残念ながら本論は、論旨をつなぐ基本部分に説得的な議論が伴うとは言いがたい。たとえば Marston は、民主カンブチア政権の政策イデオロギーと実践の両面に通底した美的感覚にも似た原初的衝動として、民族的ナショナリズム、理想的には唯一の個人的ネットワークで覆われた社会像、そして党と国家がひとつの身体として想念されるメタファーの3つを挙げるが、その原初的な性質の生成過程についての言及はない。しかし本稿は予備的な考察との断りが本文中にあり、今後の研究の進展に期待したい。

第3章は、アメリカ認知人類学が概念化した「文化モデル」という視点から民主カンブチア政権下の大量殺人を取り上げ、研究を發表している Alexander Hinton の論考である [Hinton 2002]。Hinton によると、民主カンブチアの革命は、腐敗した旧社会に対して純粋な新社会を建設しようという企てであり、その暴力の多くは、政権が不純とみなした対象を破壊する純粋化 (purification) の過程として理解できる。そして純粋性とは調和、秩序と等価であり、秩序とカオスの交代という上座仏教に特徴的な哲学への連想から、民主カンブチアのイデオロギーや行動は、古来の王権と同様に、カオスに満ちた社会に再び秩序を取り戻そうとする論理として理解できると述

べる。

ジェノサイドといった問題は、単一のロジックではなく複合的な視点から検討されるべきであると評者は考える。Hinton が純粹／不純という二項対立で整理する事象は、実際はさまざまなレベルに分かれる。また、コンピュータ・サイエンスのテンプレートといった用語で人間の社会的行為を考察する視点の限界は、実践を無視した一面的な上座仏教論にもみてとれる。

第4章は、内戦前にカンボジア農村でフィールドワークを行った唯一の人類学者 May Ebiara が、1990年代に調査村を再訪し、彼女が村を離れて以降の村人の経験についての語りから、民主カンブチア政権の権力への記憶を分析する。家屋、仏教寺院、水田、殺人が行われた森、残された地雷など具体的な景観の変化、子宮が墮ちるという女性の身体に関する語りなどにふれる一方、その悪夢を覆うようにして近年立ち現れてきた現在の社会状況を考察し、全く新しい革命的社会の建設という Pol Pot の企ては、結局は成功しなかったのだという含意を導く。

内戦以前からカンボジアに関わったヴェテラン研究者の記述からは、カンボジア社会の現状と未来に対してある種のナイーブな祈りにも似た感情を評者は時に感じる。しかし本章の Ebiara は感情論だけに終わらず、現在のカンボジア村落社会は革命以前の単純な復元ではなく、伝統は再創造され変化する状況に従って変容して現れるとの明確な分析視点に立つ点で評価できる。

第5章は、1990年代にカンボジアでの調

査を開始した研究者 2 名が、1979 年以降の農村におけるリーダーシップの変化について論じる。Judy Ledgerwood は、1980 年代にアメリカのクメール人を対象としてジェンダー研究を行った後、1990 年のユニセフのプログラムを皮切りにカンボジア本土での調査活動を開始した。他方の John Vijghen は 1990 年にまずボランティアとしてカンボジアに渡り、以後は主に開発プログラムの実施やカンボジア人調査者の育成などに関わってきた。著者らによると、1980 年代は社会主義政権による村落レベルまで直結した権力構造が明確であったが、1990 年代には開発プロジェクトなど外部社会との新しいチャンネルが重要性を増し、農村社会での意志決定プロセスには以前より多様な要素が作用するようになった。

「民主カンブチア政権によって社会制度は破壊され、後には原子化された個人しか残っていない」、あるいは「社会は単純に前革命期の状態へとゆっくり戻りつつある」というステレオタイプ的なカンボジア社会の理解に対して、最近 30 年間の農村社会の変容を実証的に考察しようという両著者の姿勢に、評者は共感を覚える。だがパトロン＝クライアント関係という分析の枠組みとの関連で、たとえば仏教モラルといった権威の構成要素を現状に即した検討を欠くまま取り上げるなど、論旨展開に粗さが認められる。

第 6 章は、人類学者 Carol Mortland によるカンボジア系アメリカ人のディアスポラ的状况の考察である。彼女によると、本国がいまや比較的 안전한場所となり、そこにクメール

の文化が存続しているという認識は、移民たちにとって非常に受け入れ難く、かわりに本国社会の潜在的な危険性と破壊され修復不可能なクメール文化という語りを神話のように繰り返している。その背景には、現在の決して楽とはいえない生活の中、移民という人生の選択への正当化が存在する。

アメリカへ渡ったカンボジア人難民を対象としては、従来、精神分析学のトラウマ研究などが主流を占めてきた。本論はそれらとは異なり、まさに最近 10 年間の本国と移民先の双方の状況の変化を射程にとらえた考察であり、興味深い。

第 7 章は、政治学者 Steve Heder が、民主カンブチア政権指導者を対象とした裁判のための国際法廷をめぐる国連と現カンボジア政府との交渉過程を分析する。当初、カンボジア政府が国連に促されて提出した裁判構想は、1979 年に実施した Pol Pot と Ieng Sary への欠席裁判と同様、フランス軍事裁判やヴェトナム人民法廷をモデルとしたものだった。しかし折りしも 1990 年代に、国際社会はジェノサイドとヒューマニティの侵害に対する国際法廷の設置を積極的に主張するようになり、政府はさまざまな修正の検討を余儀なくされた。

Heder は、修正案の提出や交渉過程をめぐる問題について、外国人専門家や国内知識人が打ち出す「何かカンボジア的であるもの」に結論を求めた分析を退け、顕在化したのは勝者の裁きと既存権力にとっての政治的便宜にもとづく刑罰の不問 (impunity) という 20 世紀に世界中で頻見された現象であり、必要

なのは内外の働きかけでそれを変えることであると結論する。詳細な政治過程の記述が中心で、論旨は説得的である。しかし正統的な政治学的関心に終始したためか、裁判問題とカンボジア社会との現実的な絡みが全く論じられていない点に物足りなさを感じる。

第8章は、イェール大学 Cambodian Genocide Program のディレクター Susan Cook が、ジェノサイドという大量殺人現象について、記録作成の意義を論じる。同プログラムは1994年に開始され、民主カンプチア政権下のカンボジアの実態を解明するために資料を収集整理し、関連目録・個人経歴・地理・写真映像資料のデータベースを作成してインターネットなどで公開している。¹⁾ 我々のヒューマニティの側面であるジェノサイドの発生を予防する目的に、カンボジアだけでなく、たとえば1994年のルワンダのケースを含めた多様な事例についての資料整理の推進が、将来は総合的な応用研究として洞察を展開することを期待したいとCookは述べる。

ジェノサイドに至る過程の普遍モデルを導き出すことができるのか、問題に関与した各国の外交戦略にまで研究の範囲を広げるべきか、ジェノサイド意識の政治的利用というイデオロギー的側面と研究との間に明確な一線を保持できるかなど、Cookは研究の将来に関する懸案も同時に提示する。本章はまさに今日的な意味で現代カンボジア社会に注がれる国際社会の関心を、前章とは別の視点から浮彫りにしており、それはまたグローバルな

国際社会へ向けた提言でもある。

「過去から立ち現れるカンボジア」という本書の表題には、ふたつの意味をみてとることができる。ひとつは内戦に始まった混乱と疲弊からの復興の途上にあるという社会の現状の意味であり、他方は長らくアクセスを欠いたまま議論の対象とされてきたカンボジア社会に、現地での調査活動にもとづく実証的な考察が加えられ始めたという研究環境の変化である。以上に紹介した8本の論考は最近10年間の新しいカンボジア研究の動向をさまざまな意味で示唆し、特に従来のカンボジア研究の閉塞的な状況を知る評者としてはそれぞれを興味深く読んだ。

しかし、論集全体としては物足りなさを感じたことも事実である。つまり幾つかの論考からは、著者の関心そのものが現地社会との接点を欠くという印象を受けた。それは、近年新しく得られた資料を用いたとしても、カンボジア社会に向けた理解の枠組みは旧態依然であり、同時代的な現状が十分に捉えられていないためともいえる。現地へ赴き、カンボジアの人々と語り合う機会がもてるようになったいま、かつて大戦中にアメリカでみられた国民性研究のような異文化研究を踏襲する必要は全くない。

編者は序論において、ポルポト派幹部を対象とした裁判設置に向けての法案が2001年1月にカンボジア国会で承認されたことに触れ、民主カンプチア政権について実態を検証し、現代カンボジア社会への影響を考察すべ

1) ホームページアドレスは、www.yale.edu/cgp

き時期がきた、と述べる。この裁判問題については本書第7章で Steve Heder が1990年代末から2000年初めまでの時期を中心に考察を展開しているが、その後紆余曲折を経て、現在もまだ設置の目処は立っていない。いうまでもなく、このクメールルージュ裁判設置問題の迷走の背景には、何よりも政権崩壊から20年という長い時間の経過がある。

評者にはここでクメールルージュ裁判の是非を論じる関心はない。しかしこの混乱をめぐる問題の構図からは、現代カンボジア社会と向かいあう研究者として留意すべきひとつの注意点を、比喩的に省察することができると思う。つまり、ある事象が問題として論じられるようになるまでには状況の変化を待たねばならなかったが、問題となるべき事象はそれ以前から存在していたという点である。当然、カンボジアには、我々外部者によって「過去から立ち現れる」と問題化される以前から、生きる人間の営みが存在していた。

本書に集められた各論はもちろん、再開されたカンボジア研究の最近10年間の到達点を把握するうえで、熟読に値する。評者としては中でも、第2章、第4章から第6章、そして第7章の各論からはそれぞれ刺激を受けた。長期的な停滞を脱したばかりのカンボジア社会研究には、まず多様な側面からの実証的な検討が求められる。しかしそれはあくまで第一のステップであり、先にはより広い時間的空間的な視野に立つ考察が待たれる。

引用文献

Chandler, David. 1999. *Voices from S-21: Terror and History in Pol Pot's Secret Prison*. Berkeley:

University of California Press (デーヴィッド・チャンドラー. 2002. 『ポル・ポト 死の監獄 S21』山田 寛訳. 白揚社).

Hinton, Alexander, ed. 2002. *Annihilating Difference: The Anthropology of Genocide*. Berkeley: University of California Press.

(小林 知, 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

Dorothy L. Hodgson. *Rethinking Pastoralism in Africa: Gender, Culture and the Myth of the Patriarchal Pastoralist*. Oxford: James Currey, 2000, 272p.

1970年代に「女性の人類学」の立場から人類学の男性中心主義が批判されてから約30年が経過したが、アフリカの牧畜社会を対象として女性の社会的役割を再評価する試みが始まったのは比較的近年のことである。この遅れは牧畜社会が民族誌上において男性中心的な社会の典型として描かれてきたことと無関係ではないだろう。たとえばポール・スペンサーはアフリカ牧畜社会の古典的研究において、ケニアのサンプル社会では女性は結婚の際に家畜と交換可能な「資源」であり、家畜と女性に関する権利を男性の年長者が管理することで若者に対して支配を及ぼす「長老制」こそが、社会の統合原理であると分析した [Spencer 1965]。いうまでもなく、そこには主体的な意思決定者として女性を捉える視点は欠落していた。

1980年代のなかばからは女性の活動に着

目した研究も徐々に発表されたが、その多くは労働力としての女性が家畜の生産活動にいかに関与しているのかをテーマとしており、それ以外の活動への目配りは希薄であった [Dahl 1987; Curry 1996]. このような研究傾向の背景には、男性が世帯レベルを越えた「公的」な領域で「政治的」な活動をおこなうのに対して、女性は「家内」領域に閉じこもり育児をふくめた世帯の生計維持活動にいそしむという図式的な二分法の存在をみてとることができよう。

本書の視座は、まずそのような二分法に懐疑を抱くところにある。実際に、この二分法が西洋で歴史的にはぐくまれた家族や世帯概念に依拠したものであることはすでに指摘されており [Yanagisako 1979], それぞれの社会で男女の活動領域がどのように形成され範疇化されているのかは興味深い研究テーマとなつてこよう。本書でも女性の生産活動への貢献はとり扱われているが、重点は従来排他的に男性の領域であるとされてきた「公的・政治的」な活動に、女性が積極的に関与している姿を描き出すことにおかれている。

編者のドロシー・L・ホジソンによる序論「家父長的な牧畜民のジェンダー、文化、神話」は、「家父長制」という概念に依拠して従来の研究を指弾しつつ、本書全体の目的を提示している。これまでアフリカの牧畜社会は「家父長的」な社会、つまり「男性が女性に対して政治的・経済的・社会的・文化的な支配を行使するジェンダー関係の一形態」(p. 5) をつよく有する社会として描かれてきた。ホジソンは、このような表象は民族誌上にお

いて生成された「神話」でしかないと批判する。牧畜社会の研究者の多くは男性であり、彼らは主要な情報提供者である現地の男性が語った周縁的な女性の姿を「客観的事実」として生産し続けてきたのである。それに対して本書は、女性の活動や地位を直接観察や女性自身の語りから明らかにすることによって、そのような「神話」を再考し、より社会の現実に即したジェンダー関係を描き出すものとして位置づけられる。本書の執筆者(共著者も含む)全16人のうち女性が実に14人を占めていることは、このような本書の位置づけを何よりも明確に示していよう。

ホジソンは、そのような作業を試みる際には、現在のジェンダー関係を外部世界との歴史的な相互作用の過程で構築されてきたものとして捉えることが必要であると強調する。アフリカの牧畜社会は従来、外部世界に固く門戸を閉ざした歴史なき社会として描かれることがあまりにも多かった。しかし古くはイスラム教への改宗にはじまり、国家の政治システムへの包摂、資本主義経済への接合、海外 NGO らによる開発プロジェクトなどが、当該社会のジェンダー関係に影響を与えてきたという事実を目をつぶることはもはや許されない。従来の研究において不可視化されてきた女性を描く作業は、同時に時間的・空間的な分析枠組みの拡大と直結する必要があると、ホジソンは指摘しているのである。

本書は序論に続いて、4部11章により構成されている。以下では各章の内容をみていくことにしよう。第1部は「文化をつくる」と題されており第1～3章からなる。これまで

牧畜社会の「文化」といえば「ウシ文化複合 (cattle complex)」ということばに示されるように家畜にまつわる事象ばかりがとりあげられてきたが、ここでは女性が家畜以外の多様な物質文化を生産・利用することで、集団アイデンティティの創出や儀礼の執行に重要な役割を果たしていることを示すのに成功している。バーバラ・ピアンコによる第1章「ケニアの西部ポコットにおけるジェンダーと物質文化」では、女性が第1子の出産後に身につける牛皮で作られたベルトの利用方法とその象徴的意味の分析から、また第2章のコリン・クラッツとドナ・ピドによる「マーサイとオキエクのビーズ細工におけるジェンダー、エスニシティ、社会的美学」では、東アフリカ牧畜民のもっとも重要な身体装飾品であるビーズ細工の製作や利用方法の詳細な記述から、女性がクラン間・民族間の差異の形成に直接・間接に深く関与していることが示される。

第3章、アンドリュー・B・スミスとリタ・ウェブリーによる「南部アフリカにおけるコイコイの女性と男性」では、ふたつの後期石器時代の遺跡から発掘された物質の多くが女性と象徴的につよく結びついたものであったことが推測され、かつて女性が多くの儀礼で中心的な役割を果たしていたことが論じられる。

第4～6章により構成される第2部「権力の諸領域」では、本稿の冒頭であげたスペンサーの研究に代表される「牧畜社会においては男性のみが政治的な意思決定や紛争解決の能力をもつ」という考え方に対する挑戦が

おこなわれている。ドロシー・L・ホジソンによる第4章「タンガニーカのマーサイにおける牧畜、家父長制、歴史：1890-1940」は、マーサイ社会の「家父長的」な構造が植民地政府の介入によって歴史的に生成されてきた過程を、古文書資料をもちいながら再構成している。19世紀末までのマーサイ社会では、男女の活動領域は明確に区分されておらず、両者の関係は平等的であった。しかし第一次大戦後、イギリス植民地政府が男性を排他的に政治的主体かつ家畜所有者と規定したために、女性はそれまでに保持していた権利を剥奪され家内領域に閉じ込められることとなった。本章の内容は本書所収の論文中最も注目すべきものであるが、植民地期以前の男女間関係をほぼドイツ人の軍人による一冊の著作のみにもとづいて「自律性をもちながら相互に尊敬しあう」関係であったとしている点にはやや疑問が残る。

歴史的な過程で女性が周縁化されてきたことを示した第4章に対して、アシャ・ハギ・エルミ、デカ・イブラヒム、ジャニス・ジェナーによる第5章「ソマリ社会の平和生成における女性の役割」は、現代の女性が積極的に「政治的」な活動に参加している事例を扱っている。父系クラン間の紛争が社会の不安定要因となっているソマリ社会において、女性はクラン間の交渉媒介役として紛争の解決に重要な役割を果たしてきたが、ソマリア内戦やケニアのワジル県での紛争といった今日の状況においても、女性は主体的に組織を創設してクランや政府の実力者と直接交渉を重ね、コミュニティに平和をもたらすための

活動をおこなっている。著者たち自身の経験にもとづいて書かれた本章の事例は、女性を紛争の被害者として描くことに専心してきた西側のメディアや研究者の安易な視線に警鐘を鳴らすものとなっている。

シアン・サリヴァンによる第6章「かつてのナミビア人『ホームランド』におけるジェンダー、民族誌的神話、コミュニティを基盤とした保全」では、ダマラ社会において女性が豊かな民俗植物学的知識を有しているにもかかわらず、近年に政府が推進しているコミュニティを基盤とした自然資源管理(CBNRM)の担い手からは排除されていることが問題視され、その原因として従来の民族誌が男性の活動を偏向的にとりあげてきたことが指摘されている。

第7～8章からなる第3部の「社会関係」では、女性を中心に形成される社会関係に焦点をあてることで、エヴァンス＝プリチャードによるヌエル社会の研究以来、今日まで受け入れられてきた牧畜社会における父系原理の重要性を再検討することを促す。両章とも既存の分析概念を安易にもちいるのではなく、当該社会の多義的な概念を精緻に分析することでその目的を達している。

ヴィグディス・ブロッホ＝デューによる第7章「家と家畜群の生殖力：牧畜民トゥルカナにおける親族とジェンダーの生産」では、ケニア北西部のトゥルカナ社会において、夫とその妻たちによって構成される男性中心の世帯と、夫の死後にその妻と子供たちによって構成される女性中心的な世帯が、世帯の発展サイクルにおいて交互に現れるもので

あることが示され、父系原理の重要性のみを強調する従来の議論は、サイクルの一段階を恣意的に切り取ったものでしかないことが指摘される。

第8章の「身分の高い母親：トゥアレグ・コミュニティにおけるジェンダー、加齢、出産後の経験」では、スーザン・ラスムッセンがニジェールのトゥアレグ社会における民俗生殖論的な言説の検討をとおして、閉経による出産能力の消失という生物学的な現象が文化的な豊饒性を獲得する契機として評価され、閉経後の女性が多くの場面でつよい社会的影響力を行使していることを示す。そして加齢や閉経を否定的に評価する西洋中心主義的な言説を相対化するために、広く比較研究をおこなう必要性を説いている。

最後の3つの章からなる第4部「開発と近代を切り抜ける」では、近年の急激な社会変化がもたらす諸困難に直面しつつ、さまざまな営みをとおして新たな生活を切り開いている女性の姿が描かれる。ソルベイク・ブールとキャサリン・ホームウッドによる第9章「ブルキナファソ北部におけるフラニ女性のミルク販売」では、93人の女性のミルク販売活動の実態と各女性をとりまく社会的・経済的要因との関連が定量的に明らかにされている。

第10章「北ケニアにおける開発イデオロギーとサンプル女性のローカルノレッジ」ではピリンダ・ストレイトが、ドイツ政府の援助による開発プロジェクトによって雇用労働や交易活動への参入機会を提供されたことで、女性が世帯の生計維持に中心的な役割を

果たすようになったこと、またその過程でもちこまれた「開発」という概念をサンプル流に再解釈することで人びとが資本主義経済への適応をはかっていることを指摘している。

第 11 章のマリオ・I・アグイラーによる「ある牧畜民の街における牧畜の崩壊と文化的連続性」は、1930 年代以降に男性のイスラム教への改宗が進んだケニア北部のボラナ社会においては、今日まで在来の信仰を保持してきた女性が多く、儀礼で執行者の立場を占め、またその場で「ボラナであること」の意味を再解釈しながら子供たちに伝えていることが示される。

以上みてきたとおり本書の対象となった地域は東部・西部・南部アフリカに及び、またとりあげられた内容も、考古学資料の解析から開発プロジェクトによる影響まで多岐にわたっている。そのため個々の事例が興味深いものとなっている一方で、各章や各部間の関連は必ずしも明確ではなく、雑多な事例を「ジェンダー」というただひとつの共通項によって論文集にまとめあげたという印象も受ける。本書の目的のひとつとして編者は人類学理論一般やアフリカ地域研究への貢献をあげているが、寄稿者にどれだけそのような問題意識が伝わっていたのか、やや疑問が残ることも確かである。また編者自身にも、従来「家父長的」な社会として描かれてきたという点を強調するあまりに、編者自身が「アフリカ牧畜社会」をひとくくりのものとして扱う傾向におちいっており、社会間・地域間の政治構造の差異や歴史的背景に対する目配りはあまりなされていない。たとえば第 3 部に

収められているふたつの章は、それぞれ無頭制的 (acephalous) な政治体系をもつ東アフリカと階層化が発達した西アフリカの牧畜社会を対象としているが、牧畜という共通の生業様式を媒介項とすることによって両社会における女性の地位には何らかの類似点が見出せるのかという疑問が編者によって提起されることはない

もっとも本書の各章で示される事例はそれぞれがユニークなものであり、従来の「家父長的」な牧畜社会像を一新するとまではいえないが、少なくとも「神話」を再考するという編者が序論で示した目的は十分に達成されている。ここで示された多様な事例に喚起されて新たな研究が蓄積していくことで、上に述べたような比較研究が今後推進されることが期待される。その意味で本書は、アフリカ牧畜社会におけるジェンダー研究の出発点であると位置づけることができよう。

引用文献

- Curry, John. ed. 1996. Gender and Livestock in African Production Systems, *Human Ecology* 24 (2): Special issue.
- Dahl, Gudrun. ed. 1987. Women in Pastoral Production, *Ethnos* 52 (1-2): Special issue.
- Spencer, Paul. 1965. *The Samburu: A Study of Gerontocracy in a Nomadic Tribe*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Yanagisako, Sylvia. 1979. Family and Household: The Analysis of Domestic Groups, *Annual Review of Anthropology* 8: 161-205.
- (佐川 徹, 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

Kay Kaufman Shelemay. *Soundscapes*. New York: University of Illinois Press, 2001, 393p.

民族音楽学は、個々の「民族」には固有の音楽文化が存在するという暗黙の了解のもとに、伝統音楽の諸特徴を人類学と歩調をそろえながら解明することを目指してきた。しかし、これまで「伝統的」と形容されてきた音楽の多くが、人々の移動や交わりのなかで形成されてきたことが明らかになり、欧米のポピュラー・ミュージックが全世界的に流通するようになった今日、「民族＝固有の音楽文化」という民族音楽学がかつて保持していた図式的理解も転換を迫られている。

本書は、アフリカや中東において民族音楽学の調査を行ってきたアメリカ人の著者によって、北米の混沌とした音楽文化状況の動態を描くことを目的に書かれた著作である。著者が提唱する視座は、まず多様な音楽文化を水平線上に並列 (juxtapose) させ、近所の「風景」として把握することである。本書は民族という単位から音楽文化をとらえるのではなく、音楽が請け負うさまざまな社会的側面から音楽文化を照らし出しつつ、その社会的側面という共通テーマを結節点として、各章が互いに結びついた連続体となるように本全体を構成することに成功している。

ユダヤ系アメリカ人の家庭に生まれた著者シェレマイは、大学院生であった70年代前半にエチオピア北部においてフィールドワークを行い、エチオピア聖教会の賛美歌や、ファラシャと呼ばれるユダヤ教徒たちの儀礼

音楽の研究に力を注いだ。そのなかでも、謎の多かったファラシャの起源や歴史について、民族音楽学の立場からアプローチして提言を試みたことは、著者の初期の重要な仕事に数えられる。

当時のエチオピアでの著者の調査や生活の様子は、後に“A Song of Longing: An Ethiopian Journey” [Shelemay 1991] のなかで詳細に描かれている。この書は、ハイレセラシエ帝政の崩壊と社会主義政権の成立に揺れるエチオピアの様子を生々しく伝えている点においても貴重である。著者はミシガン大学で博士号 (音楽学) 取得後、コロンビア大学、ニューヨーク大学、ウェスレヤン大学、ハーバード大学などで民族音楽学の教鞭をとり、民族音楽学会 (The Society for Ethnomusicology) の会長もつとめた。

本書のタイトルであるサウンドスケープ (Soundscape) という言葉には、カナダの作曲家 R・マリー・シェーファーが提唱した「わたしたちに関わるあらゆる音を風景としてとらえる一音風景」 [シェーファー 1986] という有名な定義があるが、本書ではこれとはひと味違った意味づけがなされている。著者も冒頭で述べているように、この用語はむしろ、理論的には人類学者アパデュライの提唱するエスノスケープ (Ethnoscape) に依拠した言葉遣いである。エスノスケープとは、人、技術、金融、メディア、思想の5つの「次元」からトランスナショナルな文化の流れを風景 (Landscape) という言葉を借りて表現する概念である [江渕 2000]。アパデュライのいう「次元」は、本書においては、たとえば

信仰、政治、アイデンティティの形成など、音楽に付与されるさまざまな社会的側面に相当している。

本書は以下のように構成されている。

序文

第1章 はじめに

第2章 日々の営みと音楽

第3章 人の移動と音楽

第4章 地域の音楽の観察

第5章 信仰と音楽

第6章 踊りと音楽

第7章 記憶と音楽

第8章 アイデンティティと音楽

第9章 政治と音楽

第10章 実社会での音楽

エピローグ

各章では、北米にみられるさまざまな音楽文化を事例としてとりあげ、演奏の場 (distinctive settings)、音楽様式 (sounds)、音楽がなされることの意味 (significances) の3点から立体的な描写が試みられている。そこでとりあげられる膨大な音楽文化の事例を、すべて詳しく紹介することは不可能なので、ここでは第3章から第9章までの内容を、各章の論点を中心にてみじかに紹介するにとどめておく。とりあげられる事例は、第9章のアメリカ先住民音楽の事例を除き、すべてがもともと北米の外で派生したといわれる音楽文化である。

第3章「人の移動と音楽」では、人々の北米への移住とともに同地へ「移植」されてきた音楽が世代を超え、あるものはその音楽様式を大きく変えながらも受け継がれてきた過

程と、今もなお受け継がれていることの意味が、移動が起こった歴史的な背景とともに考察される。移住した人々が故郷との文化的なつながりを保ったり、それを再確認したりするときに音楽演奏が重要な役割をはたすことが、中国、中東、ベトナム、アフリカ大陸からの移民によってアメリカで培われてきた音楽文化を事例に説明されている。

第4章「地域の音楽の観察」においては、ボストンやヒューストンなどを例に、アメリカの大都市の音楽文化をめぐる状況が、その歴史的背景、地理的条件とともに論じられる。ここでは、個々のエスニック・コミュニティの音楽文化に焦点を絞るという、民族音楽学にありがちなアプローチと並行して、誰もがアクセスできる公共の場での音楽イベント、たとえば、今まで民族音楽学者があまり関心を払ってこなかった西洋クラシック音楽の演奏や、地下鉄などでのストリートミュージシャンの演奏などにも注目し、それらがそれぞれの都市の音楽風景の「個性」を彩る要素であると述べている。

第5章「信仰と音楽」では、ワシントンにあるエチオピア正教会がもちいる儀礼音楽や、ニューヨークのキューバ系移民によるサンテリアの儀礼音楽などがとりあげられ、聖なる存在とのコミュニケーションを実践する際に音楽がはたす役割について議論が展開される。サンテリアはもともと、外部の人間が参加することのできない宗教儀礼であったが、1970年代以降、ニューヨークでは近代美術館や劇場などで公演されるようになってきた。本章はその音楽演奏のもつ意味の脈絡

変換が行われた過程や背景にも迫っている。また、宗教的脈絡における狭義の意味での儀礼にこだわらず、パレードやロックコンサート、スポーツイベント、オペラなど、儀礼の延長線上にありながらもっと世俗的な環境において音楽が人間におよぼす作用にも注目している。

第6章「踊りと音楽」において著者は、ダンスを音楽、身体の動き、衣装の3つの主要素から成る総体としてとらえ、それが文化を表象するうえで重要な役割を担っていると指摘する。また、ここではタンゴやポルカなどを例に、その伝播過程や舞踏スタイルの歴史的な変遷を踏まえうえて、ダンスが音楽同様に、それが踊られる社会状況において付加される意味合いや機能を、変幻自在に変えるものであることを明らかにしている。

第7章「記憶と音楽」では、歌詞やメロディが、特定の人物や場所、できごとを呼び起こさせ、それらを伝えたり、逆に人の潜在意識に働きかけたり、記憶を「刷り込む」手助けをしたりする作用についての議論が展開される。メキシコ系移民によるコリドー、ニューオリンズのジャズバンドによる葬式での演奏、幼児が英語のアルファベットを覚えるために歌う「ABCの歌」などが事例としてとりあげられる。さらに、シリア・ユダヤ系の人々が祝祭の時に演奏するピズモンと呼ばれる歌（アラブ諸国のポピュラー・ミュージックの旋律にヘブライ語がのせられて歌われる）を例に、アラブ-イスラエル紛争の歴史的・社会的な背景を踏まえつつ、音楽演奏が相容れない過去の記憶と現在の状況を中和

させる働きをもちうることを指摘している。

第8章「アイデンティティと音楽」では、個人や集団のアイデンティティを表象するシンボルとしての音楽について考察がなされる。ここでは、イランで生まれ、アメリカへ移住した音楽家レザ・バリ (Reza Vali) がとりあげられ、個人の音楽性がいかに構築されていくのかが議論される。室内管弦楽団のための作曲をとおして自らのアイデンティティを模索する彼の姿が、中東の音楽様式を色濃くそなえている彼の楽曲の諸特徴に関する音楽学的分析や、彼自身の生い立ちと音楽家としての遍歴などを中心に描かれている。

また集団のアイデンティティを形成する音楽のありかたのひとつとして、日本で発祥し、韓国や中国系の人たちの間でも人気があるカラオケがとりあげられる。ただし、音楽の伴奏に合わせて歌うというカラオケ音楽のありかたに言及し、カラオケが内容よりも「型」を重視する日本人の美意識を反映する音楽のありかたである、と紹介するあたりは多少疑問に感じる。

第9章「政治と音楽」では、権力を誇示するためや、政治的なイデオロギーあるいはナショナル・アイデンティティを伝達する媒体としてもちいられる音楽について考察がなされる。しかし、ここでは国家などの支配権力が大衆を操作するという図式のみで議論が集中するのではなく、支配権力への抵抗手段として大衆が音楽を利用するという事実を、ヒップホップやレゲエなどを例に説明している。またその場合、歌のメッセージがメタファーや暗号といった婉曲的な形式を踏襲し

やすいことに言及している。

このように各章は個別のテーマを探究しつつ、音楽に付与される社会的側面という共通テーマとの関連において議論が展開されている。しかしながらそれは、ほんらい流動的で不規則な音楽の姿を、あるひとつの切断面からとらえたものに過ぎないといえるだろう。そのため、それぞれの章において個別テーマのもとで紹介される音楽文化の事例は、そのほとんどが他の章の事例としても置きかえ可能であることに気づかされる。たとえば政治的なメッセージを運ぶ音楽の事例として第9章で紹介されるレゲエは、場合によってはジャマイカ移民のアイデンティティを表出するシンボルというストーリーのもとで、第8章の事例に置きかえることも可能であろう。あるいは、第5章の儀礼や第6章のダンスなどのコンテクストからも語ることができるだろう。

各章のテーマは、それぞれがまとまって完結するのではなく、互いを結びつけあう結節点として音楽の社会的側面を指定することによって、音楽行為の多面的な諸相が論じられている。このような視点に立脚すれば音楽文化には、多様な人間文化をさまざまな角度から理解する鍵になる可能性があることが示唆されるだろう。

エチオピアの吟遊詩人アズマリによって受け継がれる音楽をエチオピアにおいて学び、研究を行う私は、この本を読んで、これまで

の調査がアズマリの音楽文化の特徴や特異性を記述することに注意が向かいがちであったことに気がついた。人間は静寂も含めた「音」に対する多種多様な価値観を保持してきた。著者が本書で提示したような視点をもちいれば、簡単ではないだろうが、アズマリの音楽世界をまとまったひとつの像として浮かび上がらせることも可能かもしれない。

北米の混沌とした音楽文化のありようを包括的に描こうとする著者の大胆な試みが無謀には思えず、その言葉が虚しく響かないのは、そもそも音楽が人の生活・行動様式と呼応しあう価値の体系そのものであり、人間理解の窓口として解き放たれているからにほかならない。

なお、本書において豊富な写真と事例によって紹介される音楽は、インターネット上のサイト Soundscapes webBOOK からダウンロードして聴くことができる (<http://www.wwnorton.com/soundscapes/>)。

引用文献

- 江渕一公. 2000. 『文化人類学』放送大学教育振興会.
 山口 修. 2000. 『応用音楽学』放送大学教育振興会.
 シェーファー, R・マリー. 1986. 『世界の調律—サウンドスケープとは何か』平凡社.
 Shelemay, Kay Kaufman. 1991. *A Song of Longing: An Ethiopian Journey*. Illinois: University of Illinois Press.
 (川瀬 慈, 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)